

データから見る中国語初級学習者の誤用の考察： 形容詞述語文を中心に

著者	趙嵐, 籠谷 香里
雑誌名	研究論集
巻	112
ページ	75-90
発行年	2020-09
URL	http://doi.org/10.18956/00007929

データから見る中国語初級学習者の誤用の考察

— 形容詞述語文を中心に —

趙 嵐

籠 谷 香 里

要 旨

本研究では、中国語初級学習者に対して、一年を通して計8回文法テストを行ったが、本稿では、中国語初級学習者がよく間違える形容詞述語文の問題を主とした4回分のテストを例にとって分析・考察した。結果、学習者の形容詞述語文の誤用は、主に中国語の“是”と日本語の「は」(または「が」)、そして英語の「be動詞」との違いの認識不足、中国語の形容詞属性の理解不足、“了”が過去を表すマーカーという思い込み、などから生じていることが判明した。

したがって、本稿では、様々な形容詞述語文の誤用が生じる原因を(1)“是”構文との混用による誤用、(2)形容詞の性質による誤用、(3)過去形による誤用、(4)変化形による誤用の4方面から分析を試みた。さらに、今回の結果データを活かし、学習者の誤用に対する考察内容を踏まえて、頻出する学習者の形容詞述語文の間違いを防ぐため、よりよい授業法を見出していきたい。

キーワード：是、性質形容詞、状態形容詞、過去、変化

1. はじめに

中国語の特徴の一つは、形式上の変化はないということである¹⁾。中国語においては、形容詞がそのまま述語になり、形容詞述語文を構成する。この形容詞述語文は、初級段階において非常に重要な文法であるが、学習者にとってはなかなかマスターしにくい文型となっているようである。それは、中国語の形容詞述語文は、形式上簡単に見えるが、実際に使用する上ではいろいろな制限があるからである。

本研究は、中国語初級学習者が形容詞述語文を学ぶ中で起こる誤用に焦点を当て、「どのような問題をどのように間違えたか」をデータに取り、考察した。特に、中国語初級学習者は、日本語の「～は…です。」 = “是”と覚えるため、中国語の形容詞述語文でも“是”を使ってしまうことが非常に多い。また、形容詞が述語になる場合、普通は程度を表す様々な副詞と組

み合わせた形で、述語の位置に置くことをしばしば忘れてしまうことも少なくない。

このような誤用を防ぐために、学習者にどのように教授すればよいのか、そしてどのような練習をすればよいのかをデータ分析しつつ導き出したいと思う。さらに、様々な誤用を未然に防ぐため、学習者にとって効果的で、そして理解しやすいような教授法を探求していきたいと思う。

2. データ収集の方法

我々は、各自が担当する初級クラスの学生（合計約150人）を対象に、2019年度（春学期＋秋学期）において、7回の小テスト及び総まとめテストを行った。

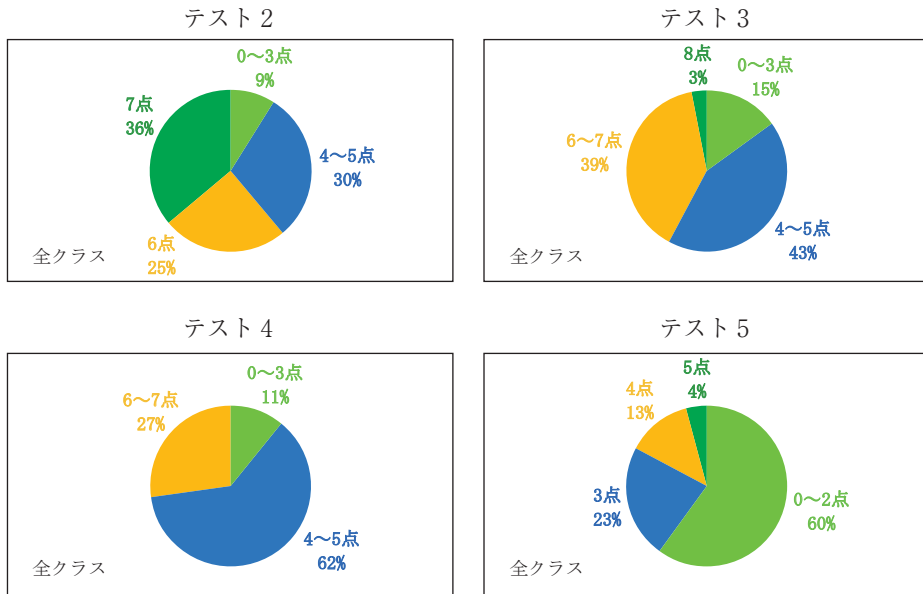
対象者	中国語初級学習者（約150人）
期 間	1 年間
テストの回数	7回＋総まとめテスト＝計8回 ※本稿では、形容詞述語文を中心とした4回分のテストを例にとる。

小テストの問題数は、毎回5問～10問程度とし、問題内容は以下に挙げる。毎回これら全てを出題するのではなく、例えば、「並べ替え3問＋間違い訂正全文書き直し5問」や「正誤判断10問」など、特に拘らずに色々試した。

・正誤判断
・並べ替え
・間違い訂正全文書き直し
・翻訳（日→中／中→日）

形容詞述語文と“是”構文に関する問題が設置されたテストは第2回、第3回、第4回、第5回の4つである。これら4回のテストにおいて、各テスト5点以上を取れた学生はほぼ半数以下となった（以下の円グラフ参照）。

これは即ち、“是”構文と形容詞述語文は、中国語の基本中の基本であり、簡単に見えるが、学習者にとってはマスターしにくい内容であることを表していると言ってよいだろう。



3. 誤用分析

3.1 “是” 構文との混用による誤用

初級中国語では、まず“是”という文法ポイントを習う。“是”は「～は…です。」という意味で“我是日本人。”（私は日本人です。）のような例文で説明される。

従って、初級学習者は「彼女は綺麗です。」という文も中国語でよく“她是漂亮。”と言ってしまう。これは、学習者が形容詞述語文の日本語訳「～は…です。」の部分で“A是B”の文型と同じであるという思い込みから引き起こされた間違いだと思われる。

また、英語では、「She is beautiful.」というように、名詞述語文も形容詞述語文も「be動詞」が使えるので、中国語も「be動詞」と混同し、“是”を形容詞述語文にも使えると思ったのではないかと推察される。

では、“她是漂亮。”はなぜ言えないのか。この理由を分析するには、まず“是”構文について考える必要がある。

3.1.1 “是” 構文の目的語

“是”の後に来る目的語は体言性成分であってもよいし、用言性成分であってもよい²⁾。

3.1.1.1 体言性目的語

体言性目的語は主に名詞、代名詞、数詞、助数詞、“的”短文などの成分であり、主語と目

的語は一種の同等、相応関係、類属関係になる³。

- (1) 中国的首都是北京。(中国の首都は北京だ) (三宅登之2012:58)
- (2) 他是外科大夫。(彼は外科医だ) (朱德熙 1982:134)
- (3) 这杯水是干净的。(この水は清潔なものだ) (朱德熙 1982:135)
- (4) 这件毛衣是他自己织的。(このセーターは彼が自分で編んだものだ) (朱德熙 1982:135)

例(1)では「A是B」の“A”と“B”は全く同じもの、「中国の首都」=「北京」、「中国的首都」と“北京”は同等関係で、この関係の場合“A”と“B”の語順を入れ替えても成り立つ⁴。“A是B”といった構文は“B”が体言性成分の場合、“A”と“B”の関係はイコール、ないしは相応するものが一般的だと思われる。即ち「Aの性質=Bの性質」、両方が対等でないといけない。

それに対して、例(2)では“外科大夫”は類であり、“他”はその類の中の一員という類とその成員の包摂関係にある⁵。ので、“外科大夫是他”のように言うことはできない。このように、類を表す文では、AがBという類に属しているという関係で、語順を入れ替えることはできない。

従って、冒頭の誤用例“她是漂亮。”が言えないのは「彼女(人間)≠きれい(状態)」で、“她”と“漂亮”の属性は不对応であり、同等関係でもなければ、包摂関係でもないからである。ここで仮に“她是漂亮的女孩儿。”(彼女は綺麗な女の子だ。)のように言えば問題はなくなる。なぜなら、「彼女(人間)=綺麗な女の子(人間)」、つまり、彼女と女の子は同種属性のものであり、包摂関係に該当するからである。

例(3)と例(4)の目的語は“的”構造で、一般的に名詞省略構造だとされる⁶。即ち、この“的”構造は「…もの」という意味を表し、日本語に訳すと「清潔なものだ」、「編んだものだ」のように訳されるわけである。

3.1.1.2用言性目的語

用言性目的語は動詞(フレーズ)、形容詞(フレーズ)、前置詞(フレーズ)などの成分であり、理由を説明解釈したり、自分の意思を弁明、強調したりする場合が多い⁷。

動詞“是”が英語の「be動詞」と大きく違う点は、目的語に用言性の言葉をとることができるということにある。

- (5) 这本书是好,我也买。(この本は確かによい、私も買う)
- (6) 我不是买不起,是不想买。(私は買えないのではなく、買いたくないのだ)

例（５）の前半は“这本书好”としても成立する。しかし、このように述語に“是”を加えることで、肯定的な気持ちが強調され、本を買う理由付けも表せているのである。

例（６）は本を買わなかった理由について説明しているのであるが、一種の弁明のニュアンスを帯びている。

従って、“她是漂亮。”は「彼女は確かに綺麗である。」というように「確かに～だ」という話し手の「認定」の気持ちを表す場合になると言えるのである。

“是”は非常に使用頻度の高い動詞で、最初の初級段階では“A是B”で「AはBです。」のように公式としては覚えておけばよいのだが、学習が進んでいくにつれて、いろんな意味を表す“是”（「肯定」、「存在」、「所属」、「要求」、「所有」、「説明」……）の説明が必要になってくるのである。

➤ 実際の誤用分析

初級段階において、学習者が形容詞述語文を“是”構文と混用するかどうかを測るために以下のような問題を試した。

[正誤判断（日本語を参考に正誤判断）]

- ・今日は暑くありません。
今天不是热。（誤答率19.8%）
- ・四川料理はおいしいですか？
四川菜是好吃吗？（誤答率20.5%）

正誤判断は○×問題なので比較的簡単な設問であるが、5人中1人が間違える結果になった。原因としては、恐らく学習者は形容詞述語文の肯定形に副詞はあるが、“是”はいらないことは覚えているが、否定形と疑問形においても“是”は必要ないということをしかりと覚えていなかったのではないかと推察される。

[間違い訂正]

- ・我今天是很忙。⇒正解：我今天很忙。/今天我很忙。
誤答例（誤答率1.2%）我是今天很忙。/今天我是很忙。
- ・这个手机不很贵。⇒正解：这个手机不贵。/这个手机很贵。
誤答例（誤答率3.2%）：这个手机不是贵。/这手机不很贵。など。
- ・这个是有点儿便宜。⇒正解：这个有点儿贵。/这个很便宜。
誤答例（誤答率96.7%）：这个有点儿便宜。/这是有点儿便宜。など。

・我们是都有点儿很累。⇒正解：我们都有点儿累。/我们都很累。

誤答例（誤答率：16.9%）：我们都是有点儿累。/我们都有点儿很累。など。

[翻訳問題]

・これは安くなく、高いです。正解：这个不便宜，很贵。

誤答例（誤答率57.9%）：这是不便宜，很贵。/这不是很便宜，是很贵。/这不是便宜，是贵。など。

・これが安い（比較ニュアンスあり）正解：这个（很）便宜。

誤答例（誤答率45.2%）：这很便宜。/这是很便宜。/这是便宜。など。

・このお茶はおいしいですね。これは何のお茶ですか？（誤答率62.4%）

→○这茶很好喝。这是什么茶？（他の茶と比較しない）

→○这茶好喝。这是什么茶？（他の茶と比較する）

→×这个茶是很好喝。这是什么的茶？

→×这个茶好喝。这个什么的茶？

→×这茶很好喝。这什么的茶？

→×这个茶很好吃。这茶什么？など。

〈間違いの傾向まとめ〉

(1) 「～は・・・です。」の文には、とりあえず“是”を使う。

(2) 長い文、複文には“是”を使う。

(3) 二種類以上の副詞を混用する。

(4) 「有点儿+ネガティブイメージの形容詞」という構造を忘れている。

(5) 疑問文、否定文にも“很”をつける。

(6) 比較の感覚を帯びていても、“是”や“很”をつける。

以上の結果から、肝要なのは、先にも挙げた通り、“是”が日本語の「は」（または「が」）、英語の「be 動詞」とは異なる点と、さらに独特な使い方があること説明することで、“是”の誤用を避けねばならないということである。

また、なぜ「彼女は綺麗です。」は“她很漂亮。”と言うのか。なぜ日本語では副詞が入っていないのに、中国語ではわざわざ副詞の“很”をつけるのか。さらに、必ず副詞が必要であるのか。それらの疑問を解くには、中国語の形容詞の性質にも少し触れるべきではないかと考えられる。

3.2 形容詞の性質による誤用

朱徳熙氏は『現代漢語形容詞研究』（1956）において、中国の形容詞について、「簡単形式」と「複雑形式」の分類をし、簡単形式形容詞は単純な属性を表す。複雑形式形容詞の表す属性はある種の量や話者のこの属性に対する主観的判断につながるものであると述べた⁸⁾。

のちに、朱氏は『語法講義』（1982）において、簡単形式形容詞を「性質形容詞」、複雑形式形容詞を「状態形容詞」と定義している。「性質形容詞」は人や事物の性質や属性を表すもので、単純な形をしている。形として、単音節形容詞“好”（よい）と二音節形容詞“高兴”（楽しい）がある⁹⁾。

三宅登之氏は次の図¹⁰⁾によって両者の表す文法的意味と、話し手がそれを使ってどのような意図を表したいかということをもとめたのである。

性質形容詞 対象が持つ属性を表す ↓ 分類する	≠	状態形容詞 ある時点での状態を表す ↓ 描写する
----------------------------------	---	-----------------------------------

（三宅登之2012：64）

3.2.1 性質形容詞

性質形容詞が述語になるときは、形容詞の前に通常、“很”という副詞を付ける。この場合の“很”は形式的に必要なもので、いわゆるお飾りの“很”であり、「とても」を表す意味があまり強くないので、日本語では特にこれを訳さないのが一般的である。

例：この本はいいです。

×这本书好。

○这本书**很**好。

では、なぜ日本語訳では副詞が入っていないのに、中国語に訳すとお飾りの“很”が必要になるのか。

学習者が“这本书好。”と訳した場合、教師は「副詞をつけない場合は、比較のニュアンスを帯びる」と説明しているのが普通のようなようである。このような説明は適切だと思うが（なぜ比較のニュアンスを帯びるかについて後文で説明する）、学習者に形容詞述語文を習得させるのに十分であるかと言えばやや疑問に思う。例えば、ある内容がとても良い本を読んで、“这本书好啊！”と感嘆するのも違和感がないように思える。つまり、“这本书很好”、“这本书好啊！”両方とも自然な中国語になるのである。

本来、人間は会話する際、「事柄」と「心的態度」を両方相手に伝えるのが普通である。

「例えば「雨が降るかなあ？」という文で見ると、「雨が降る」という客観的な事柄を表す部分（命題）と「…かなあ？」という話し手の疑念の表明といった心的態度を表す部分（モダリティ）の二つの要素から成り立っていると考えられる。それに対して、「きっと雨が降るよ。」と答える場合では「きっと…よ」が「雨が降る」に対して確実な予測をするといった心的態度を表している部分である¹¹⁰。」

性質形容詞は、その事物がどのような性質を備えたものであるかを表すだけで、文を構成するには話し手の心的態度が欠けてしまう。中国人によっては、副詞をつけない形容詞述語文はとも話者の気持ちが入っていない、味気ない文に感じてしまうようである。

また、仮に中国語で“今天冷，…”とだけ言った場合は、あくまで話題を提起しただけで、後ろになお説明が続きそうな感じになり、言い切れない文になる。日本語に訳すと、「今日は寒いので…」のような言外の意味を含んでしまう。

こういった特性上、形容詞述語文は、様々な程度副詞と組み合わせて用いることで、文法的にも感情的にも問題なく成立する。即ち、“很+冷”「程度副詞+性質形容詞」という構造になれば、今日話者が感じた時点で「寒い」という自分自身の感覚を相手に伝えようとしていることがわかるのである。

仮に、個別の語彙の意味を持つ程度副詞を使えば、“今天比较冷。”「今日はわりと寒い。」、“今天相当冷。”「今日はかなり寒い。」、“今天特别冷。”「今日はとりわけ寒い。」のような文も成立する。ただ単に「今日は寒い。」と言い切りたければ、語彙の意味が稀薄となった“很”を用いて、“今天很冷。”と言えよよいのである。

従って、“这本书好。”より“这本书很好。”のほうが自然に聞こえるのは、話者の心的態度が表れているからである。この“很”は、本来は「とても、非常に」という程度の高さを意味しているが、強く発音しない限りはその意味は表さず、文を成り立たせるための一種の文法的マーカーになっている。ただし“很”にアクセントを置いて強く読むと、「とても」という本来の意味に受け取ってもよい。

上記したように、形容詞述語文には必ず“很”のみをつけなければならないというわけではなく、ほかの副詞があれば、“很”は必要ない。実際に中国人同士の会話を聞いていると、“很”の登場率はさほど高くはないと気付くはずである。原因としては、お飾りの“很”には既に本来の意味は希薄となり、話し手の心的態度を最低限表しているにすぎないからだと考えられる。

以上のことから、より生粋の中国語を身に付けさせるため、学習者には“挺”、“真”、“相当”などの“很”以外の副詞をつける文の練習も追加すべきだと考える。また、自然な性質形容詞述語文を作るに関しては、副詞を使わずに形容詞の後に感嘆詞などの語気助詞をつけるのも一つの方法である。なぜなら、語気助詞は相手に物事の様子や状態を紹介したり、アピールしたりして、話し手の感情を表す要素が強いからである。

例：

“这件衣服漂亮啊！”（この服はきれいですよ）（郭春貴2001:42）

“他们大学大呀！”（彼らの大学は広いですよ）（郭春貴2001:42）

“这个茶好喝呀！”（このお茶は美味しいですね）（郭春貴2001:42）

以上を踏まえて、性質形容詞文には副詞が必要な理由を述べてきたが、実は形容詞単独でも述語として使えることがある。ただし、それは次の二つの場合に限る。

（1）比較文の場合

性質形容詞は単独でも述語の位置に置けることがある。

例：

“今天冷，昨天暖和。”（今日は寒いが、昨日は暖かかった。）（三宅登之 2012:65）

“哥哥个子高，妹妹个子矮。”（兄は背が高く、妹は背が低い。）（三宅登之 2012:65）

性質形容詞はあるものが本来兼ね備えている属性を表すので、形容する対象に一つ一つラベルを貼って分類を行う。“今天冷，昨天暖和。”は、今日と昨日を比べて、今日のほうに「寒い」というラベルを貼り、寒い日と分類し、昨日の方に「暖かい」というラベルを貼り、昨日は暖かい日という部類に分類している。“哥哥个子高，妹妹个子矮。”も兄と妹を比べて、兄が背の高いほう、妹が背の低いほうと分類している¹²⁰。

性質形容詞は、他との比較を常に念頭に置きながら「これは…だ」と属性のレベルを貼っている。分類は二つ以上のものを比較対照して初めて意味を持つので、先に挙げた“今天冷，…”と言っただけだと、他と比較しているにも拘らず、その比較相手が不明確で、文を言い切った語感もないのである。“今天冷，昨天暖和。”のように比較要素が揃ってようやく文として成立するのである。

（2）疑問文、回答文の場合

“这个好吃吗？—“好吃。”

疑問文には、ある事柄（命題）に対する「疑念」、「不確定」という話し手の気持ちが入り、心的態度が既に含まれているので、そもそもお飾りの“很”をつける必要はない。

さらに、質問に対する返事の場合に関しては、要するに“好吃”なのか、“不好吃”なのかがわかればよいので、単に“好吃”だと回答すれば、答えは“很”なしで比較の意味も含まれない。

3.2.2 状態形容詞

状態形容詞は、事物の具体的なある時点における状態を描写する。人や事物をリアルに描写するので、「確かにそういう状態である」という話し手の認定、強調の気持ちが含まれる。状態形容詞は以下のいくつかに分類できる。まず2音節の状態形容詞を見てみよう。

AB型：雪白（雪のように白い—真っ白な）

笔直（筆のように真っすぐ—真っすぐな）

冰凉（氷のように冷たい—非常に冷たい）

例：君の手は氷みたいに冷たい。（郭春貴2001：52）

× “你的手很冰凉” ○ “你的手冰凉”

同じ形容詞であっても、“很凉”は言えるが、“很冰凉”とは言えない。なぜなら、“雪白”“冰凉”は普通の性質形容詞と違って、何か具体的なものを使ってその様子を生き生きと表現する状態形容詞だからである。

例えば、“雪白”は「雪みたいに真っ白」、「冰凉」は「氷みたいに冷たい」ことを表している。つまり、前半Aの部分为代表的なものでその状態を比喻している。後半Bの部分はその形容詞である¹³。程度副詞はレベルを表し、Aは相応する代表的なものを表し、両方とも話し手の心的態度を伝えているので、一緒に用いる必要がないわけである。



→ “冰凉”

他の例には“漆黑”（漆みたいに真っ黒な），“血红”（血のように赤い），“火热”（火のように熱い）などがある。また、Aの部分は名詞とは限らず、物の状態を表す形容詞や動詞もあり得る。例えば“通红”は「全体が真っ赤だ」、「滚烫」は「お湯が沸いたように熱い」という意味になる。

AA型：大大（でっかい）小小（ちっちゃな）圆圆（真ん丸い）

このAA型は形容詞を重ね型にすることで、単独の形容詞より肯定、強調の気持ちが含まれる。この重ね型は“的”と一緒に名詞を修飾することができる。

“那个胖胖的小孩儿很可爱”（あの太っている子供はとても可愛い）（郭春貴2001:53）

“我有一条红红的裙子”（私は真っ赤なスカートを持っている）（郭春貴2001:53）

さらに、3音節、4音節の状態形容詞もある。

ABB型：红通通（真っ赤な）干巴巴（かさかさな）热乎乎（ほかほかした）（郭春貴2001:P53）



→ “热乎乎”

3音節のABB型は形容詞Aに特定の後置部分BBが付くものである。例えば“热乎乎”（ほかほかした）は“热”と“乎乎”という特定の後置部分で作られた状態形容詞である。“热”だけではただ温度が高いという抽象的なイメージを表し、それに対して、“乎乎”をつけると、蒸気が上がるようなりアルな描写になる。

4音節の状態形容詞には、以下の様々なパターンがある。

ABAB型：雪白雪白（真っ白な）冰凉冰凉（非常に冷たい）

AABB型：干干净净（きれいさっぱりしている）大大方方（ゆったりとしている）

A里AB型：啰里啰嗦（くどくどしい）古里古怪（風変わりな）傻里傻气（まぬけな）

A里BC型：稀里糊涂（愚かな）花里胡哨（色のけばけばしい）

A不BC型：灰不溜秋（ドブネズミ色だ）白不吡咧（色褪せて白っぽくなっている）

副詞+形容詞+“的”：挺好的（とってもよい）怪可怜的（すごくかわいそうだ）

（三宅登之2012：63）

以上のように、状態形容詞はある性質、例えば「白い」、「熱い」、「きれい」といった性質が存在していることを前提に、その性質がどの程度のものか、どういった様子をしているかを生き生きと描写しているものである。

機能的に言えば、状態形容詞は「程度副詞+形容詞」の構造に相当するものとして扱う。文法的に言えば、性質形容詞と状態形容詞の差異は、前者が静態を示し、後者は動態を示すことである¹⁴。

- “教室里很干净”（教室はきれいだ）
- “教室里干干净净”（教室はさっぱりときれいだ）

従って、状態形容詞は、既に基本的性質に対して肯定的な心的態度があり、否定形はなく、程度副詞は付けないのである。

×很 雪白 ×不 雪白
 ×比较 热乎乎 ×不 热乎乎
 ×非常 干干净净 ×不 干干净净

性質形容詞と状態形容詞の比較対照一覧表¹⁵

	形	働き	程度副詞の修飾	“不”で否定	述語になる
性質形容詞	<単純形> 白 热 清楚	性質、属性を表す 観念的 抽象的	<受ける> 很白 非常热 比较清楚	<できる> 不白 不热 不清楚	おかげの“很” 必要 墙很白
状態形容詞	<複雑形> 雪白 热乎乎 清清楚楚	生き生きとした 状況描写 認定的 強調的 具体的	<受けない> ×很雪白 ×非常热乎乎 ×比较清楚楚	<できない> ×不雪白 ×不热乎乎 ×不清清楚楚	おかげの“很” 不要 ×墙很雪白

3.3. 過去形による誤用

中国語は時制がない言語で、現在も過去も未来も同じ形が使われる。日本語の「食べる」は現在・未来形、「食べた」は過去形と言われる。中国語の“吃”はどんな場合も“吃”で変わらない。しかし、過去を表す時間名詞、動詞の性質や他の語とのくっつき、文脈で未来、現在、過去を表すことができる¹⁶。

中国語の形容詞の現在、過去、未来の形はすべて同じである。日本語の形容詞は過去の状態になると、「忙しかった」、「面白かった」、英語も「I was busy」、「It was interesting」と言う。そのせいか、学習者はよく形容詞の過去の状態を中国語で言う時“了”をつけてしまう。

また、多くの教科書に“了”の意味を「…た」と訳しているので、学習者は“了”が過去形を示すマーカーだと思い込み、過去形の形容詞述語文の文末にも“了”をつけてしまう傾向がよく見られる。

➤ 実際の誤用分析

まず、中国語の形容詞述語文に過去形がないことを理解しているかどうかを測るために、以下のテストを行った。

[正誤判断：(日本語文を参考に、正しい文に (○) をつけなさい。解答は一つのみ。)]

・昨日は暑かった。

昨天是热了。(×) 昨天很热了。(×) 昨天很热。(○) 昨天是很热了。(×) 昨天热了。(×)

正解は“昨天很热。”だが、最も誤答率が高いのは“昨天热了。”(誤答率37.3%)と“昨天很热了。”(誤答率23.3%)であった。

・この中華料理はおいしかった。

这个中国菜是很好吃了。(×) 这个中国菜是好吃了。(×) 这个中国菜很好吃了。(×)

这个中国菜好吃了。(×) 这个中国菜很好吃。(○)

ほぼ半数の学習者が“这个中国菜好吃了。”(誤答率45.3%)、“这个中国菜很好吃了。”(誤答率41.3%)を選んだ。このことから、学習者の強い「“了” = 過去形のマーカー」という思い込みを消すために、以下のように、過去、現在、未来の三つの時制の形容詞述語文を練習する必要があると感じた。

例：

昨日は寒かった。⇒“昨天很冷。”

今日は寒いですね。⇒“今天很冷。”

明日は寒いかもしれない。⇒“明天会(可能)很冷。”

さらに、以下のような変化を全く意味しない過去形の形容詞述語文に、故意に“了”をつけて、その間違いを学生に気づかせようとする練習を通して、“了”が全て過去を表すものではないことも強調していかねばならないであろう。

例：

×“昨天的电影很有意思了。”⇒○“昨天的电影很有意思。”

×“上个月我非常忙了。”⇒○“上个月我非常忙。”

×“昨天去的四川饭馆儿不好吃了。”⇒○“昨天去的四川饭馆儿不好吃。”

3.4変化形による誤用

「昨日は暑かった。」を訳すと“昨天很热。”が正解である。学習者はこれを“昨天热了。”とよく誤訳してしまう。しかし、仮に「昨日から暑くなってきた」という意味を表したい場合であれば“昨天(开始)热了。”と言えるのである。

実際には、文末の“了”語気を表す以外、段階の状況を表すには以下の三つの機能がある¹⁷⁾。

- ① 新しい状況の実現：“春天了”（春になった）（郭春貴2001：133）
- ② 状況の継続：“我学了三年了”（勉強して3年になる）（郭春貴2001：133）
- ③ 完了の状況：“信写好了”（手紙は書いた）（郭春貴2001：133）

以上の例文を見て分かるように、動詞文の“了”が動作の持続、完了の意味を表すのと異なり、名詞、形容詞の後に“了”がついた場合は、新しい状況が発生したこと、以前の状況から別の状況に変化したことを表すのである。

しかし、改めて考えてみると、動作の完了も一種の変化であると言ってもいいであろう。即ち、“了”は諸事項の「結束⇔進入」臨界転換変化のマーカードと認識しても構わないと思われる¹⁸⁾。

- (1) “她的脸红了”。（彼女は顔が赤くなった）（三宅登之（2012：160）
- (2) “天凉快了”。（気候が涼しくなった）（三宅登之（2012：160）
- (3) “家具旧了”。（家具が古くなった）（三宅登之（2012：160）

形容詞述語文は動作が存在しないので、当然動作完了の状態はありえない。従って、“了”は必ず新しく起きた変化の意味を表すのである。さらに、“他明年就是大学生了。”（来年、彼は大学生になる。）この文の“了”は「…になる」という未来の変化を表している。

➤ 実際の誤用分析

初級学習者は過去時制の形容詞文を作る時に、つい“了”と“的”を文末に置いてしまう傾向が強いため、以下のテストを行った。

[正誤判断（中国語原文を参考に、正しい日本語訳に（○）をつけなさい。解答は一つのみ）]

- ・学生没做作业，老师有点儿不高兴了。（誤答率45.3%）
- 学生が宿題をしなかったので、先生は少し不機嫌になった。
- ×学生が宿題をしないので、先生は少し不機嫌になった。（誤答率19.3%）
- ×学生が宿題をしていなかったで、先生は少し不機嫌だった。（誤答率18%）
- ×学生が宿題をしないので、先生は少し不機嫌だった。（誤答率8%）

この問題を見ると、26%の学習者が“不高兴了”の意味を「不機嫌だ[・]だ[・]だ[・]」と誤解していることが分かった。“了”を見ると、すぐに過去形であると考えてしまう傾向にあるようである。

[間違い訂正（日本語を参考に間違い訂正全文書き直し）]

・この料理はおいしくなかったので、父は少し不機嫌になった。

这个菜是不好吃，爸爸不太高兴的。

→○这个菜不好吃，爸爸有点儿不高兴了。

〈学習者の間違い（誤答率57.8%）〉

→×这个菜不是好吃的，爸爸不太高兴的。

→×这个菜是不好吃，爸爸是不太高兴的。

→×这个菜不好吃了，爸爸不太高兴了。

以上の問題でも、学習者にとって、過去時制の文にそのまま形容詞のみを使うのには抵抗があり、どうしても過去形のシンボルだと勘違いした“了”、“的”をつける傾向が強いと見て取れる。

4. 終わりに

外国語の学習に誤りは付き物だが、言葉の誤りは早いうちに直すことが非常に重要だと日々痛感する。しかし、教師は学習者の誤りをただ訂正するだけではなく、なぜ間違っただのか、なぜこのような誤用に至ったのか、それをどのように直せばよいのかを考えねばならないであろう。

さらに、学習者の誤りから教師自らも教授法を見直し、学習者が同じ間違いを繰り返さないように、正しい中国語をどのように学習者に定着させるのかを模索し続けなければならないと思う。

一年を通して行ってきた本研究であるが、成果は、学習者が「どのように間違えるのか、そしてなぜ間違えるか」を採取できたことが大きい。これにより、学習者の誤答パターンと原因をある程度把握できた。そして、学習者にとって必要な教学文法が何であろうかと考察できた。

今後、文法テスト作成の際などには、今回のデータを参考にし、より合理的且つ有効な問題が作成できるであろう。さらに、学習者が誤答しがちな問題にも先回りして説明することができるような効果的な教授法を模索していこうと思う。

注

- 1 呂叔湘（1980）7頁
- 2 朱德熙（1982）134頁
- 3 劉月華（2000）679頁
- 4 三宅登之（2012）58頁

- 5 朱德熙 (1982) 135頁
- 6 劉月華 (2000) 680頁
- 7 劉月華 (2000) 682頁
- 8 朱德熙 (1956) 83頁
- 9 朱德熙 (1982) 55頁
- 10 三宅登之 (2012) 64頁
- 11 相原茂・石田知子・戸沼市子 (1996) 60頁
- 12 三宅登之 (2012) 65頁
- 13 郭春貴 (2001) 52頁
- 14 輿水優・島田亜美 (2009) 236頁
- 15 相原茂・石田知子・戸沼市子 (1996) 53頁
- 16 荒川清秀 (2003) 120頁
- 17 郭春貴 (2001) 133頁
- 18 張黎 (2012) 67頁

参考文献

- 呂叔湘 (1980) 《現代漢語八百詞》 商務印書館
- 劉月華 (2000) 《實用現代漢語語法》 商務印書館
- 朱德熙 (1982) 《文法講義》 白帝社
- 朱德熙 (1956) 《現代漢語形容詞研究》 語言研究第一期 科学出版社
- 郭春貴 (2001) 『誤用から学ぶ中国語』 白帝社
- 張黎 (2012) 《漢語意合語法研究》 白帝社
- 荒川清秀 (2003) 『一步すすんだ中国語文法』 大修館書店
- 輿水優・島田亜美 (2009) 『中国語わかる文法』 大修館書店
- 三宅登之 (2012) 『中級中国語読みとく文法』 白水社
- 相原茂・石田知子・戸沼市子 (1996) 『Whyにこたえるはじめての中国語の文法書』 同学社

(ちょう・らん 英語国際学部講師)

(かごたに・かおり 英語国際学部講師)